

令和5年度(2023年度)チャネルキャットフィッシュ採捕状況

石崎大介・山本充孝

1. 目的

近年、県内において特定外来生物チャネルキャットフィッシュの確認数が増加している。拡散を防止して未然に漁業被害を防ぐために、採捕情報を収集して生息状況を把握した。

2. 方法

県内の漁業協同組合にチャネルキャットフィッシュが採捕された場合には、水産試験場に連絡するように依頼し、漁業者により採捕された全ての個体を回収した。回収した個体は、採捕日、採捕場所、全長、標準体長、体重を記録した。あわせて、水産試験場が実施した調査および滋賀県漁業協同組合連合会(以下、漁連)が実施した駆除事業における採捕個体も同様に記録した。また、一部の漁業者に依頼した漁獲日誌および漁連と水産試験場による採捕データから、延縄の針100本あたりの採捕数(CPUE)を求めた。なお、採捕場所は県内の水域を北湖、南湖、瀬田川洗堰(以下、洗堰)上流の瀬田川(瀬田川上流)、洗堰下流の瀬田川(瀬田川下流)に区分した。

3. 結果

2023年度の本種の採捕数は南湖4個体、瀬田川上流29個体、瀬田川下流223個体であった(図1)。北湖での採捕はなかったほか、他のすべての区分で昨年に比べて採捕数は減少した。南湖や瀬田川上流は昨年と比較して半分ほどの採捕数となった。

CPUEは瀬田川下流では昨年より減少したが、高止まり状態である。一方、瀬田川上流のCPUEは2018年にピークを示しその後は徐々に減少しており、南湖においては低位で推移している(図2)。

瀬田川下流での採捕数が多いことやCPUEが高い値で推移していることは、本種がこの

エリアで定着しており生息数も多いためと推察される。しかしながら、瀬田川上流や南湖で本種の採捕数やCPUEが減少しているのは2019年から瀬田川上流を中心に実施している漁連の駆除事業の効果がみられているためと考えられる。

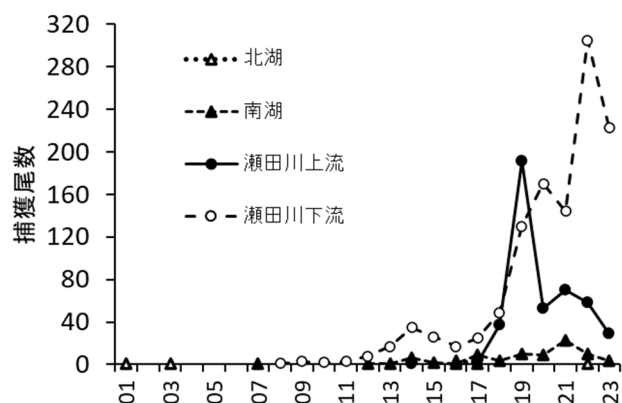


図1 チャネルキャットフィッシュの採捕状況

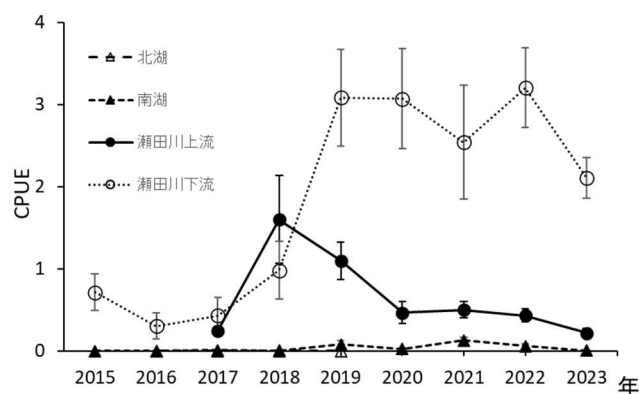


図2 各水域の延縄による
チャネルキャットフィッシュのCPUE